

一節 = 「農耕生活」と文化

人間の生活様式や思考は、自然や風土の影響を強く受ける。

約 2000 年前までは、日本人の生活はもっぱら採取に依存していた。

農業が始まって以来、古代から稲、大麦、小麦、粟、大豆、大根などが栽培されていたが、最も大切な作物は「稲」だった。稲は、穂から籾(穀粒)を取り離す脱穀をして、籾摺りをした玄米をさらに白米にする。「米」が、早くから日本人の主食だった。稲を上手に育てて、米の収穫量を増やすことが、当時の人々の大きな生活目標となり、以来、暮らし方、社会の仕組み、ものの考え方が徐々に変化していった。

稲の起源・原産地は、中国の長江(揚子江)中流域、インドを中心とした熱帯の東南アジア、中国南部奥地の雲南地方、などの説があり、稲が日本に渡来したのは縄文時代後期と言われる。

◇ 古代人の信仰 ◇

民族は、人と自然との関係を通して固有の文化を形成する。

また、自然環境の違いが「異なる神」を信じさせる理由になった。

自然の猛威が少ない地域では温和な神が信仰の対象になり、自然の脅威にさらされる地域では、荒々しく強い神が信じられた。

日本は火山帯に属するため地震が多い。

夏の終わりから秋にかけて台風の影響で、稲の成熟期に当たるため大きな被害を受けた。しかし、これらの災害は一過性のもので、自然は温和な状態が多く、妥協して調和を保つべきもの、という観念が養われた。その結果、「日本の神話に出てくる神々」は、強大な力を持つ「絶対神」ではなく、「喜怒哀楽を持った人間性豊かな存在」だった。

◇ 農業と文化 ◇

日本では、家畜の飼育は外国に比べて少なく、日本人の食生活は古くから農作物が中心だった。ほとんどが海外から渡来した農作物は、日本の風土で育てる上で、多くの工夫と努力が必要だった。どの作物も成長可能な時期が限られていたため、農作業に適した時期を熟知して工夫すれば豊かな収穫が可能になった。

農作業の適期を逃さないためには、常に季節の変化を読み取って準備を進めることが大

切だった。

季節の変化を的確に把握するために、「人々は自然の景観を敏感に観察する」ようになった。

日本人にとって、観察の対象は天体より地上の自然物で、「桜が咲き始めた」など、自然界の変化を敏感にとらえるようになった。

季節に対する鋭い感受性が養われ、文化の各領域に影響を及ぼした。

◇「稲」と文化 ◇

日本の自然環境は、人が自然に働きかけて、たゆみない工夫と努力をすれば、豊かな恵^{めぐみ}みを与えてくれることが分かった。

とりわけ、「稲」は他の作物と比べて多くの労力と手間を必要とした。

「米」という字は「人が『八十八』回、手間^{てま}をかける」ことを意味する。
手間をかけるほど多くの収穫をもたらした。

勤労の効果がはっきり現れ、「勤勉は善」という倫理観が定着していった。

「日本人は労働^{とうと}を尊^{うやまつ}ぶ民族」と言われるのも、稲作と大きく関係している。

また、稲は水田^{すいでん}で栽培し、生育に合わせて水田の水量を調節しなければならない。用水施設の整備が必要になり、共同で管理し利用する習慣が出来上がった。稲作の場所や用水施設が固定された結果、住居は田の付近に集まり、家と家の関係が深まり、地域社会が形成された。

そこでは、自己中心の行動をすれば全体に迷惑をかけるので、「常に個人よりも集団の利益を優先させる意識」が必要だった。



二節 = 「^{しゅう だん し こう}集團志向」

◇ 「家」 制度 ◇

日本人は、まとまって行動する「集團志向」が強い。

一つの集團に属することで具体的な利益だけでなく、精神的な安心も得られるからだ。

それは、日本の農耕社会と、その中での「家」制度に由来する。

弥生時代(紀元前 3 世紀から紀元 3 世紀頃)以降に村落での^{ていじゅう}定住が始まった。

村落社会は「家」が重要で、構成員は緊密な関係にあり、^{じょうちよ}情緒が支配する閉鎖的な共同体だった。

村落の人たちは先祖からのつながりと親戚関係を大切に、「大家族」として暮らした。とりたてて自己主張をしたり、村の^{おきて}掟を破ったりすると「のけ者」にされ、そこに住んでいくのが難しくなる。掟を破った者を「^{そうしき}葬式と火事の二つ以外」では仲間は^{むらはち}ずれにする「村八分」が起きた。

村落では、おのずから上下の人間関係が出来た。個人としての自覚は弱く、「集團の利害」が優先された。『農耕社会と「家」に支えられた日本人』は、集團に対する忠誠心は発達したが、個人を主張する観念は十分に養われなかった。

◇ ^{しゅうだん き ぞく い しき}集團帰属意識 ◇

「家」はもともと経済生活を前提とした共同防衛組織だった。

戦後の経済成長に伴い農村の都市化や家内労働の企業化が進み、旧来の「家」制度は崩壊し、社会構造も大きく変化した。

しかし、日本人の思考方法や倫理規範は、閉鎖的な社会の中で「人間関係を重視する傾向」から容易に抜け出せなかった。

日本の「家」制度の特徴は、現代の企業や官公庁の伝統的な終身雇用制と年功序列制に生きている。^{てあつ}手厚い福利厚生を通して、組織への帰属意識が強まり、^{ちゅうせいしん}忠誠心が高まった。

しかし、近年、経済・産業のグローバル化に^{ともな}伴って、日本でも能力主義が^{たいとう}台頭し、パート、アルバイト、派遣社員、契約社員などの非正規社員が急増している。伝統的な終身雇用制や年功序列制は徐々に変質し、「個人」意識の高まりとともに、日本人の「集團思考」も変わりつつある。

三節 = 「^{じょ}「^{れつ}序列社会」

◇「^{いったいかん}一体感」の序列社会 ◇

日本人は自分が集団に属していることで安心感を抱き、一体感を得る。

集団の結びつきを強めて人々が平穩^{へいおん}に暮らしていくために、「上下関係」が重視され、「序列」が重要な意味を持つ。

日本社会は、人々が上下関係を維持することを要求される「序列社会」、いわゆる縦割りの「タテ社会」だ。タテ社会の「序列」を決める基準は、社会的地位、年齢、経験年数、性別など。

村落社会^{そんらく}での「序列」は、多くの人が集まる場所での「座る場所」に表れる。権力を持っている目上の人が一番上位の「上座^{かみざ}」に座るなど、座順・席次に一定の決まりがある。

和室では、入り口の反対側を「床の間^{とこま}」といい、そこに近い所が年齢の上の人や地位の高い人が座る「上座」。入り口付近は「下座^{しもざ}」になる。

上下関係を重視する国民性は、発言の順序・時間だけでなく、日本語の「敬語」を発達させた。日本人の謙遜^{けんそん}や遠慮^{えんりょ}も「序列」と関わっている。

現代のタテ社会でも情緒^{じょうちよてき}的な一体感が生まれる。会社や役所では、上司が部下の結婚式の仲人^{なこうど}をし、職場ごとの運動会や花見、慰安旅行などで、上司と部下は仕事も生活も一体となる。

共有の場での序列が決まり、「内^{うち}の者」と「外^{そと}の者」の区別も生まれる。



四節 = 「和」の精神

法隆寺(奈良)を建立した「聖徳太子」(574年～622年)が604年に制定した「十七条憲法」の冒頭に、「和を以って貴しとなし、逆らわないことを尊ぶべし」とある。

聖徳太子の「和」の哲学は、文字通り、「心を和らげ、仲良く、力を合わせる」こと。具体的には、「仏教を敬い、国家の中心である天皇に服従する」ことを政治の基本とし、「広く人間全体の平等と成仏を説く教え」だった。

飛鳥時代(6世紀末～7世紀前半)以来、「和」の観念は日本人の特徴的な精神となった。

日本では、外来の文化を土着の文化に適合させる形で受け入れた。

6世紀に大陸から伝来した「仏教」も、日本人が古くから信仰していた「神道」と共存する形で取り込んだ。日本人は包容性を備えていた。聖徳太子の仏教解釈によれば、「人間は本来、聖人もいなければ、極めて愚かな人もいない。すべて仏の子である」。

仏教は、「和の精神」と相通じるものだった。

「和」を尊重する日本人にとって、「人間は自然に屈服すべきもの」ではなく、「人間と自然は調和を保つべきもの」だった。

日本の建築物や庭園も、自然の素材を生かしてきた。

日本人は、自分の意見を公表し行動を決める時、相手にどう思われるか、他人はどう考えるかを気にして、「相手に配慮をする」場合が多い。

外国人にしばしば「曖昧だ」と批判される日本人の言動は、「和の精神」につながっているのだ。

他人との摩擦をできるだけ避けようとする意識が日本人の意識の根幹にある。

日本人は長い歴史の中で、序列社会・タテ社会を生き、「集団志向」を強め、「和」を重んじる精神を形成してきた。



五節 = 「^{しん こう しん}信仰心」と「^{しゅう きょう}宗教」

日本人の宗教観の特徴は、「同時に、いくつもの信仰の対象を合わせ持つ」ことだ。

こどもが生まれたら「^{じんじゃ}神社へ^{みやまい}お宮参り」をし、

「^{はつもうで}神社や寺に初詣や受験・就職のお願い」をし、

「キリスト教の教会か神社で結婚式」を挙げ、

「葬式は寺で」、というのが日本人の典型的な一生だ。

◇「^{げん せ}現世中心」で^{らくてん}楽天的 ◇

「宇宙の万物に^{ばんぶつ やど}宿る^{れいこん}靈魂を^{すうはい}崇拝する」というアニミズムが宗教の基本だ。

日本人の祖先は厳しいが豊かな自然に親しみ、恵みを感じながら暮らしてきた。

日本の「神道」は^{た しんきょう}多神教の信仰であり、「^{おう か}現世を謳歌して、生きる」という現世中心的な意識が日本人の「信仰心」の基盤となっている。

日本人のものの考え方の特徴は、実際に目に見えている世界を大事にし、与えられた環境や条件を肯定すること。現実の世界とは別の絶対的な神の存在を認めなかった。日本古来の信仰は自然発生的なもので、人々の日常の生活習慣と深く関わり、体系的な教義もない「民間信仰」として定着した。

現実の世界に意義を認める日本人の精神文化は、自然を愛することに由来している。

自然に脅威を感じながらも、「人間と対立するものではなく、恵み深く、人と一体になるもの」というのが「日本人の自然観」だ。

日本人は、日常生活の中で人間の欲望や感情を無理に抑制し、それに打ち勝とうとしなかった。インドの原始仏教や中国の「仏教」で厳守された戒律、例えば「^{ふ いん しゅ}不飲酒」などは、日本の「仏教」では必ずしも守られない。

また、^{じょ や}除夜の鐘や^{せつぶん}節分など、中国の風習が日本に伝わった後、日本人の生活と密着して独特の行事に変わったものも多い

◇ 日本の「宗教」 ◇

日本人は神道的なものを根幹としながら、^{しんじょう}仏教的なものを積極的に取り入れて融合を図り、キリスト教も受け入れた。

^{ゆる}緩やかな信仰心が日本人の精神文化を形成し、奈良時代には、固有の「神の信仰」と「^{せつちゅう}仏教信仰」を折衷して調和させる「^{しんぶつしゅうごう}神仏習合」が始まった。

何かを実現したいと願う時、日本人は「神様、仏様、・・様」と、様々な人や物にすがって、「^{かみだの}苦しい時の神頼み」をする。

2014年12月時点の文化庁の調査では、「宗教」の^{しんじょう}信者数で最も多いのは、「^{しんとう}神道の9,216万人」。次いで、「^{ぶつぎょう}仏教・8,712万人」、「^{しんきょう}キリスト教・195万人」、その他の^{しよきょう}諸教・897万人(天理教、PL教など)。

信者数を合計すると、1億9,022万人になる。

これは、日本の総人口(約 1 億 2,711 万人)の 1.5 倍に当たり、一人が複数の「宗教」を信仰していることになる。つまり、「無宗教」的な要素も持ち合わせていることになる。

【神道】

5～6 世紀の古墳時代に人々の心をとらえたのは、日本固有の「神」の信仰だった。その「神」は宇宙の至るところに存在すると考え、人々は山、川、岩、樹木などを信仰の対象にした。やがて人里近くに、自然や祖先を崇拝する神を祀る建物として神社が作られた。

日本人は奈良時代に編集された「古事記」や「日本書紀」に書かれている神話・伝説に基づいて、「神」を敬い、祖先を尊ぶために祭祀を行ってきた。

日本最古の歴史書「古事記」に次の記述がある。

「草や木がそれぞれに言葉をしゃべり、国土のそこそこで、岩や石や草の葉が互いに語り合い、夜は鬼火のようなあやしい火が燃え、昼は群がる昆虫の羽音のように至る所でにぎやかな声がした」。

大昔、人は大自然に驚かされ、心を緩めることが出来なかった。そこで、自然の中で「神」の動きを注意深く見守り、「神」の怒りを招かないように行動した。供え物を捧げて「神」のご機嫌を伺ったりした。原始的な「神道」は農耕儀式と結びつき、神々の保護がなければ稲の収穫も期待できないと考えた。

奈良時代、大和民族は同じ祖先から出た多くの家族の集まりである氏族で構成されていた。氏族の中で最も有力だった天皇氏族を中心として氏族国家が形成され、国家統一へ進んだ。

「神道」は家、村、郷土という共同体の中で功労のあった人を祀る習慣があり、徐々に「神」的なものと、「人間」的なものが交じり合った。特定の教祖は存在せず、特別な経典もない。神々の数が多く、「八百万の神」と言われる多神教の色彩が濃かった。

古代の「神」を祀る伊勢神宮や出雲大社、住吉大社などが「国の神」を祀る「国家神」の神社として人々の崇敬を集めた。

明治維新(1868 年)以後、政府は「神道」を国の「宗教」とするため、「神の信仰」と「仏教信仰」を調和させる「神仏習合」を廃止し、「国家神道」を国民に押し付けた。各地の「神道」を皇室神道の下に一体化し、国家宗教として再編成した。

天皇の祖先の同一血統のつながりが「天皇制」の形をとって日本民族連帯の中心となり、万世一系の思想に発展した。

しかし、日本が第二次世界大戦で敗北した後、GHQ(連合国軍総司令部)の指令により、軍国主義・国家主義と結びついて天皇を現人神(人の姿になってこの世に現れた「神」)とし、天皇制による支配を正当化する思想的支柱だった「国家神道」は解体され、国と「神道」は分離された。

【仏教】

「仏教」は6世紀の飛鳥時代^{あすか}に日本に伝来した。

当時は、新しい文化の一環として取り入れられ、「信仰より学問や教育」という要素が強かった。

奈良時代(8世紀)に入ると、「仏教」は国家権力と結合して発展し、国を護るために地方に寺を建立^{こんりゅう}する国分寺^{こくぶんじ}計画が地方へ伝播した。しかし、僧侶の活動は一般に寺院の中に限られ、民間への布教はあまり強くなかった。

平安時代(794年から約400年間)の初期に、「最澄^{さいしやう}」が「天台宗^{てんだいしやう}」を、「空海^{くうかい}」が「真言宗^{しんごん}」をそれぞれ開いた。いずれも「宗教」が国家に従属することを否定し、自らが開祖^そとなって仏教の新しい宗派を作った。

平安中期になると、「仏教」は普段の生活に溶け込んで、庶民に親しまれた。

鎌倉時代(1185年から約150年間)には、鎌倉六宗^{かまくらろくしやう}といわれる「浄土宗^{じやうどしやう}」、「浄土真宗^{じやうどしん}」、「時宗^{じしやう}」、「臨済宗^{りんざいしやう}」、「曹洞宗^{そうとうしやう}」、「日蓮宗^{にちれんしやう}」が開かれた。

それぞれが、「易行(いぎやう)」などの共通理念を持っていた。

「易行」とは「他力の念仏」で、「人々が救われるためには、厳しい修行^{しゆぎやう}は必要ない。経典^{きやうてん}の中から一つの教えを選んで、もっぱらそれにすがればいい」と説いた。祈祷や学問が中心だった「仏教」は人々の心の内面に深く入り、「利他救済^{りたきやうさい}の立場」から「人間全体の平等と成仏^{じやうぶつ}」に力点を置いた。

江戸時代(1603年～1867年)の「仏教」は幕府の権力下にあった。

庶民が檀徒^{だんと}(寺の信者)であることを寺に証明させる寺請制度^{てらうけ}によって、ほとんどの人々が「仏教」と関わった。

一方で、「神道」は日常の信仰として生き続けた。「神の信仰」と「仏教信仰」を調和させる「神仏習合」の時代はあったものの、「神道」と「仏教」は一体化することなく、違いを守りながら共存してきた。

明治維新の直後に、「神道」を国教(国の宗教)とするため「神仏分離令^{しんぶつぶんりれい}」が出された。

明治時代(1868年～1912年)の初期には、「仏教を廃^{はい}し、仏教の開祖である『釈尊^{しやくそん}』の教えを棄^すてる」ことを命じた「廃仏毀釈^{はいぶつきしやく}」が行なわれ、多くの寺院、仏像、経文^{きやうもん}などが破壊され、仏教界は一時、大きな打撃を受けた。

【キリスト教】

室町時代^{むろまち}の天文18年(1549年)、イエズス会の宣教師フランシスコ・ザビエル^{かごしま}が鹿児島に上陸して「キリスト教」を各地に広めた。

しかし、安土桃山時代^{あづちもみやま}(1573年～1598年)に豊臣秀吉^{とよとみひでよし}が「キリスト教」の宣教師を追放。江戸時代には徳川幕府が慶長12年(1612年)に「キリスト教」の信仰を禁ずる「禁教令^{けいちょう}」を出してキリシタン信者を国外追放するなど、「キリスト教」は激しい弾圧を受けた。

江戸時代初期の17世紀初めに75万人に上ったキリスト教徒の多くは「禁教令」によ

って改宗^{かいしゅう}を余儀なくされた。

しかし、一部の信者は迫害^{はくがい}に屈せず命を捨てて殉教者^{じゆんきやうしや}となった。また、隠れて信仰を続ける信者も多く、その人たちを「隠れキリシタン(切支丹^{きりしたん})」と呼んだ。

その後、明治政府が 1873 年(明治 6 年)に「禁教令」を解いたため、誰でも「キリスト教」を信仰できるようになった。

